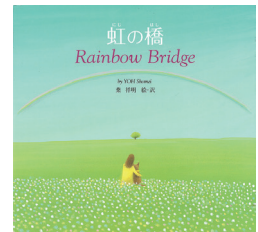




episode 9 いつか、「虹の橋」で

投稿者 ジュン さま(東京都)



『虹の橋 Rainbow Bridge』
葉祥明 絵・訳
佼成出版社 2007年

今から4年前の5月8日0時過ぎ。

寝ようとしているときにまた、愛犬・錦之介の悲鳴が聞こえてきた…。

妻(錦之介ママ)がすぐに鎮痛剤をのませようとするのだが、薬を口に入れてもあまりのみこまない。

このところ食べ物や水を全く口にせず、体に入れるものは薬と水だけ。

体をさすったり、頭をなでたりすると安心するのか、断続的にあげる悲鳴もおさまることがあった。

しかし、これも単なる気休めに過ぎない。

ペット専門タクシーのKさんにすぐ来てもらえるように手配をし、動物救急病院へ行く。

処置室からは、注射や手当を受けたときのものだったのだろう。錦之介の大きな鳴き声を何度か耳にした…。あれが、妻と私が聞いた、愛犬・錦之介の最後の鳴き声だったかと、後にしみじみ思う。

翌日早朝、救急病院から電話があって、錦之介が天国へ行ったことを知らされた。

愛犬・錦之介、14歳と10か月の生涯だった。

動物霊園に電話をすると、火葬並びに葬儀を当日にしてもらえるとということであった。

その日は暑い、夏を思わせる日であったため、

錦之介の遺体の傷みを心配して、早々に錦之介の葬儀を執り行うことにしたのだ。

夕方、お世話になったペットタクシーのKさんが、お手紙と花束を持って慰めに来てくれた。

お手紙にはKさんの自筆のお悔やみの言葉のほかに、『虹の橋』という絵本も添えられていたのが目を惹いた。

『虹の橋』を開いてみた。カバーには次のような端書があり、どのような癒しの言葉より私の心を慰めてくれた。

愛するペットとの別れは、／ 永遠のものではありません。

どうしてって？ ／ だって、いつか、「虹の橋」で／ 再会できるのですからー。

この絵本を何度も開いた。

この絵本によって私たち夫婦は、愛犬・錦之介に逢えると、どれほど励まされてきたのだろうか。

絵本には、子供だけでなく、私たち老人を含むどんな世代の人の心にも響くメッセージと、

励ましを伝える力があることを改めて知らされた。

「絵本の日アワード in FUKUOKA 2021」投稿作品より

本連載は「医療法人元気が湧く」が主催する“絵本の日アワード”に応募された作品を掲載していきます。毎年、300～450編の応募がある「絵本にまつわるエピソード」の作品から、「絵本の魅力」と「絵本のチカラ」のつまったエピソードを選び、その魅力と感動を読者の方々にも共有していただきたいと願って、投稿者の了解を得て紹介しています。

さらに、人に影響を及ぼした絵本のバックグラウンドについて、司書の専門的な視点による解説を加え、一冊の絵本のある部分では“深く”、そしてある部分では“広く”、興味を広げていただきたいと企画しました。



医療の現場が注目した絵本

画家であり詩人でもある葉祥明氏が、『虹の橋 Rainbow Bridge』を出版したのは2007年、平成19年のことでした。しかし、その一年前、既に同名の絵本が音楽評論・作詞家で著名な湯川れい子氏による訳で宙出版より刊行され、話題を集めていました。

ペットロスに苦しむ人々を癒やし、希望と生きる力を与える『虹の橋』は、グリーンケア材として医療の現場が注目したのです。淡いパステルカラーで描かれた葉祥明版の出現で、その注目度はますます高まりました。



文明の力は、国境とことばを超える

『虹の橋』の原作者は湯川氏でも葉氏でもありません。アメリカで広まった作者不詳の散文詩が2000年代になって世界中に拡散され、ペットや親しい人との死別を体験した何千万人、それ以上の人々の心を救ってきました。

21世紀を境に国境を超えて全世界に広がったのは、情報環境の発達が大きく作用しています。Windows95が登場した1995年を契機として一般家庭にインターネットが普及しはじめ、2001年以降は「定額常時接続の普及期」となりました。この情報化社会により、その昔、年配者からの口承によって語り継がれてきたお話が、地域や国といった特定の民族・文化を超えて、世界中に広がるようになったのです。



べールをかぶった神秘的な詩

世界中で感動を呼んだ「虹の橋」は、作者不詳であるがゆえ、複数の人が原作者を名乗り出てきましたが、いずれも特定には至っていません。そして、今や作者不詳のべールをかぶり続けたまま、国境だけでなく世代をも超えるロングセラーになったのです。

日本民俗学者の調査によると、インターネット上での「虹の橋」の初出は1993年1月7日、The Caniners

という団体が配信したメールとされています。しかしながら、その出典はグレートデーン保護団体が発行するニューズレターに掲載されていた記事の引用なのです。さらに、この団体もまた、秋田犬保護団体から伝え聞いたと言っているのです。つまり、愛犬家たちのメールやニューズレターを媒介として、「虹の橋」が徐々に広がっていったことがうかがえます。



べールが解かれるとき

作者不詳のまま、ソーシャルメディアによって広がり続けた「虹の橋」の原作者が2023年、ついに判明しました。その作者とは、イギリス・スコットランド在住の女性、エドナ・クライン＝リーキー氏82歳です。「作者不詳のままであることが納得できなかった」というアメリカの美術史家ポール・コウドゥナリス氏の粘り強い調査の結果、とうとう突き止められたのです。

1980年代に創られたと推測されていた「虹の橋」は、原作者の発見によって1959年作詩であることが明らかになりました。それは、エドナ氏のはじめての愛犬メジャーが亡くなったときに書き留めたものだったのです。そののちにパートナーとなった夫に作品を見せると、出版を提案されるのですが、「メジャーとのプライベートなもの」として公開を望みませんでした。しかし、夫の説得は続き、せめても身近な友人と共有するに留めたのだそうです。これが発端となり、詩を読んで胸を打たれた人々が、さらに誰かと共有することで「Rainbow Bridge」は作者を置いたまま、水面の波紋が広がるように全世界へ知れわたることになったというわけです。

60年越しに原作者が発覚した「虹の橋」は、また新しい歴史を刻み始めているのです。

文献

- 1) 加藤秀雄：虹の橋と地獄の人参(二)，世間話研究(26)，pp.18-30, 2018.
- 2) 日経ジオグラフィック：ペットロス癒やす有名な詩『虹の橋』、謎だった作者が判明か，NATIONAL GEOGRAPHIC HP <https://natgeonikkeibp.co.jp/atcl/news/23/030400117/2023/3/6>